

Basic Books. (シヨーン, D. A. 柳沢昌一・三輪建二 (訳) (2007). 省察的実践とはなにか—プロフェッショナルの行為と思考— 鳳書房)

「抽象から具体へ」の拡張としての実践知

香川 秀太

本報告では、「実践知の捉え方」「実践知の発達過程」「実践知と質的研究」の3点について述べる。

1. 実践知をどう捉えるべきか

実践知は、科学の隆盛とともに研究者により、客観的で厳格な指標を用いて、一般化、標準化された。彼らは現実の具体的な実践における曖昧さや複雑さを、抽象化により削ぎ落とし、原則的で合理的な知として実践知を位置付けた。そして実践者に対し、その知を合理的な教育で、合理的に習得させようとした。

しかし、むしろ一般化・抽象化することで剥ぎ取られた、あるいは、それでは捉え切れない、諸主体の感覚・情動を含む実践の曖昧さ、複雑さ、あるいは、その唯一個別の実践者が、その唯一個別の状況で、唯一個別に振る舞う「具体性」こそ、実践知の中核である。

2. 実践知の発達過程とは

この具体性は、実践知の発達における栄養素でもある。例えば教師にとっては、個別具体的な自分が、時々刻々と変化する、個別具体的なその教室の状況(個別具体的な生徒・学生たちを含む)の中で、様々な喜怒哀楽を伴いながら、個別具体的に振る舞う過程で、実践知は、その主体に個別の形で発達していく。

初心者は当初、抽象的な理論知や原則知を行為の拠り所とし、それ故状況との結び付きが弱く、融通の利かない振舞いもしばしばする。しかしその当人が、様々な場面で、抽象知を媒介しながら様々な行為をし、手応えや限界を「実感」し、省察していく。それらを通し、周囲の種々の資源のよりスムーズな利用、状況変化に対する原則に縛られない柔軟な対応、人々の動きのリズムへのより円滑な同調が可能になる。同時に、独自の形で実践に貢献してもいく。実践知の発達とは、固有の身体に特定の状況が深く染み込んでいくと同時に、逆に具体的状況へ身体が広がっていく過程である。

この過程では、抽象知は、当初の暗記された一般的な知識としての地位を超え、その当人の実体験、実感、実例に満ちた、遙かに具体性豊かなものになっていく。この意味で、専門家とは、誰でも同じ標準技能を持つ人物ではない。他の誰でもないその人独自の状況行為をする人である。故に、その人独自の専門家としての価値が現れるのである。

3. 実践知と質的研究

実践知は、しばしば言語化困難な暗黙知ともたとえられる。ただし、言明困難な理由は、知が身体内部に自動化されるからではない。第1に、実践知は2つとない個別具体的な知であるが故に、既存のテキストで言説化された、ありきたりな言葉でとらまえることが困難なのである。第2に「語ること」は、そもそも常に変化の渦中にあり、複雑曖昧な状況的行為(動き)を、あえて他者にも理解可能な言葉で明確に境界化してとらまえることである。故に言明困難となる。

時に職人芸と呼ばれる質の高い質的研究は、まさにこうした「研究者自身の実践知」からなる。そうした職人芸を誰でも使える一般的な手続きとして言明し、それに準じれば質的研究が可能という宣伝文句は、まさに実践知の抽象化の考えに基づくもので、同じ誤りを引き起こす。むしろ、抽象知を助けとしながらも、それに支配されず、対象現場の具体的な内実に向き、具体性に敏感で柔軟で個別な、その都度の創造的な分析行為と永遠の技術発達こそ、研究における職人芸と考えるべきだろう。

なお、ここで述べた実践知とは「非言語的な知」のことではない。言語は身体から発せられる行為であり、身体行為も言語によって様々な調整を受ける。身体は物的環境に拡がっている。その意味で、そもそも言語と非言語の二分法は誤りである。実践は、それらが複雑に絡まり合う運動であり、知はその中にある。

指定討論—実践知と質的研究に共通する「ものの見方」と今後の問題—

やまだようこ

企画者の趣旨説明のあと、各話題提供者から興味深い実践例が提示された。そこで各研究者に共通して見られる「ものの考え方」の基本を整理し、今後の問題を提示する。

1. 実践知と質的研究の関連

実践知あるいは臨床の知と、質的研究とは同義ではないが深い関連があると考えられる。なぜならば質的研究は、次のような世界の見方やパラダイム変換を含むからである。

(1) フィールド(現場)と研究者の関係性やポジション
質的研究において研究者は、杉万氏や佐木氏が言うようにフィールドと離れて「外在する者」とは位置付けられず、「伴走する者」である。研究者はフィールドの中に参与(パーティシペイト)し、その中で当事者とインタラクションを持つと考えられる。したがって、研究者もフィールドの中でアクティブに動き相互行為を行う。

ただし、質的研究においては、研究者が問題解決を目

指して実践する当事者になるか、当事者と近い立場に立つか、当事者の行為の観察者や記録者になるか、その参与の程度は様々になりうる。

(2) 文脈(コンテキスト)の重視とローカルな知

質的研究では、社会・歴史・文化・状況的文脈を離れて、いつでもどこでも誰にとっても唯一正しい現実としての普遍的知を目指すのではなく、文脈に埋め込まれたローカルな知と多様な知を重視する。したがって、本山氏が言うような「フォークサイコロジーや物語りの知」、佐木氏が言うようなローカルで「豊穡な生活の知」、香川氏が言うような「具体を重視する思考」は、まさに質的研究が目指すものである。

(3) 広義のナラティブ(語り・物語)やリフレクション(省察)の重視

質的研究の中核にはナラティブ・ターンがあり、広義のナラティブ・アプローチと連動している。次の2.において、より詳しく述べる。

(4) 出来事と変化プロセスの重視

質的研究では、因果関係を明確にするための原因→結果、仮説→検証という一方向的な記述ではなく、文脈の中で、どのような出来事が起こったか、それがどのように変化したかという変化プロセスの記述を重視する。佐木氏が「踏みとどまる」「問題が立ち上がる」「折合いをつけなければ、前へ進めない」ということばで生き生き

と記述したものが、それにあたるだろう。

2. 実践知とは何か?—ナラティブとの関係において—

実践知とは、何だろうか。それは、当事者と行為を共にする実践的研究やアクション・リサーチそのものを指すのだろうか。実践知は、茂呂氏や本山氏が言う「実践をめぐる言説の流通」や、杉万氏が言う「言説空間」とどのような関係にあるのだろうか。なぜなら、当事者に近い位置で実践活動に参加することと、それを言説として物語ることとの間には、一筋縄ではいかない大きな距離があると思われるからである。

実践知は、香川氏が言うように、語りにくい「言明が難しい」ものであるが、それを「非言語的」「身体知」「暗黙知」と呼んで言語と二元分割する旧来の方法に戻してはならないわけである。言語化しにくい経験を、どのように広義のことば(映像や動作を含む)にして組織化・有機化して、伝えていくのか。これは、「経験の組織化(organization of experience)」として定義される、広義の「ナラティブ(語り・物語)」のテーマでもある。このテーマは、そのまま経験知、実践知をどのようにナレートするのか、どのように伝え、どのように教えるのかという、教育心理学の課題として問われることになる。この古くて新しい教育心理学の問いは、新しい質的心理学的のもの見方と方法論によって、新しい展開を生み出すかもしれない。